

## 論文

# ジョージ・ミュラーの孤児院草創期 (1835-1842) の苦悩と試練

——精神的不調と財政上の危機——

木原活信<sup>†</sup>

**要約**：本論文では、ジョージ・ミュラーの孤児院開設の草創期（1835-1842）に焦点をあて、特に開設直後のミュラーの精神的不調と孤児院の財政的危機について論じた。これまでのミュラーの伝記では、2000人規模の孤児院経営という「奇跡」的事業や諸困難を「祈りによって解決」したといったエピソードを軸に紹介されてきた。しかし本論では、それにはハイライトをかけず、これまでの伝記では触れられてこなかったミュラーの内面的葛藤と経営の問題に焦点をあてた。特に半年間にわたって精神的不調により休業せざるを得なかった経緯、そして逼迫した財政状況を分析した。神のみに頼る「実験」のため、その趣旨を理解した者以外からの献金を受けない、借金をしない、集金目当ての広告をしないといった方針により結果的に過酷なまでの財政危機となった。しかし逆説的にその危機的財政基盤ゆえに、世界のキリスト者たちが多額の献金で支えた。そしてまたミュラーは、「頭の病気」という精神・神経症状と格闘したが、逆にその「脆さ」と「弱さ」ゆえに、愚直なまでに神に頼り続けた点にこそ、「奇跡の人」「偉人」ではないミュラーを理解する本質と鍵がある。

**キーワード**：ジョージ・ミュラー、ブリストル孤児院、ブラザレン運動、キリスト教社会福祉

## 目次

はじめに

1. 孤児院の開設 1835-1837
  - 1-1. 開設準備
  - 1-2. 「あなたの口を大きく開けよ。わたしがそれを満たそう」
  - 1-3. 第1, 2ホーム開設
2. ミュラーの苦悩と心身の不調 1837-1838
  - 2-1. 「頭の病気」
  - 2-2. 休業と回復
3. 孤児院経営の危機 1838-1839
  - 3-1. 財政悪化
  - 3-2. 貧窮とその助け
4. 更なる試練のとき 1840-1842
  - 4-1. 慈善事業と神の事業

<sup>†</sup>同志社大学社会学部教授

\*2021年7月4日受付, 2021年7月6日掲載決定

4.2. 「極限の極貧」と「内なる人」

4.3. 「暗闇を歩く」

結語

## はじめに

本論文では、孤児院開設を最終的に決断するミュラーの動機の解明と、孤児事業を展開しはじめた初期の頃の苦悩について焦点をあてていくこととする。すでに筆者は、前の論文においてミュラーの青年時代の迷走と回心に焦点をあて、孤児院の着想の経緯について明らかにした（木原 2021）が、それを受けて本論ではその後実際に孤児院を創設していった経緯と孤児事業草創期にミュラー自身が経験した深刻な苦悩と試練に焦点をあてていく。分析対象としては 1835 年から 1842 年の期間とする。

ところで、これまでのミュラーの偉人伝や伝記類では、一人の偉人による 2000 人規模の孤児院経営（孤児数は述べ 1 万人を超える）という「奇跡」的偉業、困難を「祈りによって解決」云々という「奇跡的」エピソードが数多く並べられているが、本論では、そこには焦点はあてない。むしろミュラーの内面の葛藤、特に精神的苦闘（半年間精神的不調により休業）していった経緯、またミュラーの草創期の孤児院経営上の特徴と、自転車操業に陥り、財政的危機となった孤児院経営の問題を中心に実証的に論じていくこととする。

ここでは、機関誌 Müller, George (1837) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume I, London: Dryden Press（以下、Narrative: George Müller）<sup>(1)</sup>、ミュラーの自叙伝<sup>(2)</sup>、ピアソンの伝記<sup>(3)</sup>をベースに、ミュラーの内面的世界を辿り、その背景も踏まえつつ、時系列的に孤児院創設に至る最終的な経緯とその後の苦悩の詳細を明らかにしていきたい。本稿の時期区分については、ミュラーの内面的世界を重視するために、基本的にミュラー自身の自叙伝の区分に依拠している。

## 1. 孤児院の開設 1835-1837

1835 年、ミュラーは年齢 30 歳になったが、この年に孤児院開設という人生の一大転機を迎える年とも重なる。孤児院開設のビジョンに関しては、前の論文で既に明らかにしてきた通り（木原 2021）であるが、1834 年の日誌に記載されている通り、当時の救貧院（ミュラーはこれを「監獄」と意図的に記している・・・）に行かなければならなくなかった一人の孤児の悲しみに心を痛めていた（木原 2021）。そして同じ頃に路上で貧困児童へのパン配布をしはじめたこと、そして 1834 年に母体法人である聖書知識普及協会（The Scriptural Knowledge Institute for Home and Abroad: SKI）を設立させ、既に

孤児事業の構想の外堀は埋められており、まさに機が熟してきたということもできる。しかし具体的な孤児院創設それ自体についてはこれまでも散発的に予告的な話はあるが、必ずしもそれほど明確な形として表出されているわけではない。以下では、その経緯を時系列的に追っていきたい。

### 1-1. 開設準備

1835年11月20日の日誌の記述のなかに、唐突ではあるが、あるキリスト者の女性宅（氏名等は不明）でお茶を飲んでいたときにそこにたまたま置いてあったフランケの伝記に目を留め、「自分もフランケのように孤児事業に導かれているのではないか」という漠然としたある思いが与えられた、と記載がある（Müller 1860: 92）。ドイツのハレで孤児院を設立したフランケ（August Hermann Francke, 1663-1727）の敬虔主義の影響については既に論じた通り、孤児院創設それ自体はミュラーにとって必ずしも唐突な話ではなく、その着想はすでにあたためてきており、とりわけ母校ハレ（Halle）大学にかかわる大先輩フランケという先駆者の前例を一つのモデルとしていたということは間違いない（木原 2018）。

それ以降、孤児院開設という気持ち、彼のなかで日増しに大きくなっていく。そして真剣に孤児院開設の構想について神に祈り始めた。そしてまず、共同牧会者、SKIの共同責任者の盟友ヘンリ・クレイク（Henry Craik, 1805-1966）にこのことを相談した。もしも信頼するクレイクがこの構想に反対するか、あるいは聖書に基づく明確な禁止の「示し」があれば、この計画を即座に放棄する覚悟であった（Müller 1860: 96）。しかしながら、クレイクはむしろミュラーの孤児構想に大いに賛同し、これを一緒に担っていくことを明言した。またここで brother C に相談したとある（Müller 1860: 96）。brother C が誰なのかは推定であるが、ミュラーが重大な決断をするときに、助言を求めている初期ブラザレン運動のリーダーであった伝道者のチャップマン（Robert C. Chapman）であったと推察される（木原 2019）。彼については後述する。いずれにせよ、brother C がミュラーの孤児院に全面的に賛同してくれたことによりミュラーは一步前へこの話をすすめることができた。こうしてミュラーのなかではこの思いが神から来たものであるという確信が与えられた（Müller 1860: 96）。

そして1835年12月2日に、教会全体に総会を開いてその思いを会衆全体へ打ち明けることとなった。教会総会においても、特に異論や反対はなく、その方向性で更に備えてすすめていくことになった（Müller 1860: 96）。こうして次第に開設に向けての周囲の環境は整えられ、あとはミュラーの具体的な準備とそれに向けての行動への決心が求められることとなった。

## 1-2. 「あなたの口を大きく開けよ。わたしがそれを満たそう」

そして、3日後の1835年12月5日、生涯の支えとなる聖句に強い励ましと確信を抱くことになったと記録されている。それは「あなたの口を大きく開けよ。わたしがそれを満たそう」（詩篇81篇10節 新改訳2017）という短い詩篇の聖句である。この言葉はその後あらゆる場面で引用され、実質上にミュラーの生涯におけるモットーとなった。そしてそれ以降、孤児院開設に向けて、必要な土地、建物、1000ポンドの準備資金、孤児院のための働き人、が与えられるように具体的に願い祈り始めた。そして数日後には、最初の献金1シリング、備品としての家具、タンスなどが与えられた（Müller 1860:96; Pierson 1899: =1964:110-112）。

ところが、その数日後の設立総会当日の1835年12月9日になって、なぜかミュラーはこの孤児院構想に対して突然不安になる。そしてすでに定まりつつあった構想を白紙撤回してそのすべてから撤退して退くことまで考えたと告白している。なぜそのような思いになったのか、そしてそれが何であったかの真相を知りたいところであるが、「霊的に落ちこんだ」（I was low in spirit）（Müller 1860:96）などと抽象的表現が書かれているだけで、それに関しては必ずしも明示的ではない。ピアソンは、「サタンが激しくミュラーに火の矢を浴びせてきた」（Pierson 1899:121=1964:112）と神学的比喩表現で解釈しているが、なぜそれが「サタンの攻撃」であったのかなどについては日誌や書簡などの資料からは分からない。しかしその「攻撃」を克服して、総会においてミュラーは自らの孤児院創設の必要性を感情的にではなく、冷静に粛々と語った。

年が明けた1836年1月16日に、教会の総会で言明したその内容が声明文となった。そこには孤児院設立に向けた三つの大きな理由を掲げている。以下そのまま引用する。（Pierson 1899:123-124=1964:112-113）

- ①神が必要な費用を備えて下さる方法によって、神にたよることが無益でないことを世に証明し、神の栄光を現すこと。
- ②父母を失った子供たちの霊的な向上を推進させること。
- ③彼らの日ごとの必要を満たすこと。

（Narrative: George Müller では補足的にこの詳細を追記している。）

こうして、いよいよ孤児院設置計画が具体的になっていく。初めの構想では、その対象を7～12歳という年齢に限定した孤児を考えたが、これは後に孤児院運営と社会的ニーズに基づき、7歳未満の乳幼児も加えて12歳以下に変更した。このあたりから、機関誌（Narrative: George Müller）、自叙伝では、孤児院の準備の進行状況、献金、その他の捧げもの（備品、食料等）などについての具体的な数字を示す記載が多くなっていく。そしてそれは次第にエピソードやストーリー性のある話よりは、あたかも会計簿

か領収書のようなものとなっていく。

ところで、肝心の孤児院運営を担う人材であるが、すでに総会の翌日の1836年12月10日には、男性と女性の信徒各1名がこの働きのために献身することを表明した。以下にその手紙が記されている。

私たちがその資格があると認めいただけるならば、私たちは計画中の孤児院の働き人として献身します。また、主が私たちに与えてくれたすべての家具なども捧げます。私たちを雇うことが主のご意志であるならば、主は私たちのすべての必要を満たしてくれと信じて、この働きでは一切給料をいたしません。主がすべての必要を満たしてくださいと信じています。  
(Müller 1860 : 96)

### 1-3. 第1, 2 ホーム開設

このような経緯を経て、ついに1836年4月21日に娘のための第1ホームをブリストル市ウイルソン街 (Wilson Street) の6番地に開設することになった。孤児院開設とは言っても、実際はミュラーの家族が住んでいる賃貸契約の借家をそのまま孤児院として使うことになった。そして第2ホームとして同年1836年5月18日に男女の幼児を引き受ける施設を別に開設することを発表した (Pierson 1899 = 1964 : 115-116)。

しかし、奇妙なことに広告等で孤児の募集をかけても予想に反して最初は一人の孤児も現れなかった (Müller 1860 : 105)。「彼の驚きと無念さはどれほどであったろうか」 (Pierson 1899 = 1964 : 116) というほど、彼は改めて神に祈り求める日々が続いた。しかし、徐々に孤児たちが各地から送られはじめて、1837年4月8日には第1ホームも第2ホームもそれぞれ孤児が集められ30人となった (Pierson 1899 = 1964 : 117)。

この年、すなわち1837年8月15日に、ミュラーは自身の半生を描いた『主の取り扱いに関する物語』 *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself* を出版することになった (後には4巻本が公刊されるが、ここではその第一巻ということになる)。ところがすでに印刷されて山積みになった本を前にして、これを果たして公に出すべきか否か最後まで躊躇している様子が詳細に記されている (Pierson 1899 = 1964 : 119)。ミュラーは孤児院開設にあたって設立総会の直前にも同様の不安があったことは先述した通りであるが、何か重大な事をなそうとする直前に突然強い「不安」が現れるという傾向がある。ミュラーはそれを自ら弱気と不安にさせようとする「サタンの誘惑」 (Pierson 1899 : 129) と自己理解しているようだが、心配症的性格、あるいは不安神経症的な傾向の一部とも考えられる。ここでの出版の不安の中身は、この本が神の栄光ではなく、自らの売名行為になっていないかという自己吟味であった。しかし結果的にそれは杞憂であり、この本が出版されたことにより、多くの読者がミュラーの趣旨に強く賛同し、長きに渡って孤児院の理解者、その支持者となった (Pierson

1899 : 129)。

こうして軌道に乗り始めた孤児事業は、1837年10月21日に更に第2ホームのすぐ隣接地に男児のための第3ホームを開始することになった (Müller 1860 : 114)。こうしてブリストル市ウイルソン街には、女児、男女乳児、男児の三つのホームが孤児院として開設されひとまずは順調に開設されていった。

## 2. ミュラーの苦悩と心身の不調 1837-1838

ブリストル市ウイルソン街に三つの孤児院が順調に開設されていったが、その後すぐに、孤児事業は暗礁に乗り上げてしまう。それは、開設後すぐに、ミュラー自身が、心身疲労となり半年間休業を余儀なくされるなど、業務遂行において機能不全に陥ってしまったからである。それと前後して孤児院も極度の経営困難に陥るという「試練の年」を迎えることとなった。1838年から1842年までの4年間は、ミュラー自身にとっては、自らの信仰が試される試練と危機の年となり、それを通して彼の言葉によれば「内なる自己」が鍛えられ、成長する時でもあったが、ここでは、まずその発端となった1837年から1838年にかけての彼の精神的不調に焦点をあてる。

### 2-1. 「頭の病気」

ミュラーは孤児院運営だけでなく、一方で牧会者<sup>(4)</sup>、伝道者であり、集会（教会）における説教、牧会の働きだけでも多忙であった。ミュラーとクレイクの開拓伝道の結果、教会は発展し、教会員も増え続け、開拓伝道から数年で400名を超える信徒数となった。そのような大きな働きがあるにもかかわらず、更に新たに孤児院の重責を担ったのである。一方で、「祈りの人」と言われるミュラーは、活動や説教よりも、神との内なる交わり（祈り）を第一にした人物であった。神学者ピアソンが以下のように認めるのも事実なのかもしれない。

おそらくジョン・ウェスレー以来、長い人生を送った人でも、ジョージ・ミュラーほど多くのことを行った人はいないであろう。しかし同時に、この人ほど人前から退き、長時間にわたって祈りの幕屋で過ごした人はいないであろう。事実、その生涯は、人間社会における活動や仕事よりも、祈りと願いととりなしをするためにより多くの時間をさいていたと言えるのである。(Pierson 1899 : 130)

しかし、皮肉にも「積極的に退く」、あるいは「身を隠す」というよりも、やむを得ずに退却せざるを得ない深刻な状況が訪れた。それはミュラーを襲った原因不明の病であった。この頃、ミュラーは、「頭の内部に妙な病気」「頭の病気」(weakness in the

head) にとりつかれたように悩まされるようになっていた。実際、たびたびその奇妙な表現が日誌に現れるようになる。特に 1838 年の日誌におけるこの病との葛藤の記述は痛々しいほどである。1838 年以前からもこの症状はあったとされるが、彼の自叙伝を見る限りそれに該当する記述は必ずしも明確ではない。そして具体的にこの「頭の病氣」と言われるものが、この時点の記録だけからは何であったかは特定できないと言わなければならないがその後の症状全体から、現代的に推定するならば自律神経症、鬱症状のようなものであろうと思われる。ミュラーの場合、かなり症状が深刻で、時には理性を脅かさせるように思われることもあったと以下のようにピアソンは記載している。

1838 年が明けたが、ミュラーは依然として頭の脆弱さと困難 (weakness and distress in the head) で苦しんだ。症状は変わらずに悪かった。特に彼にとって試練だったのは、この病気のために、怒りやすくなってしまいう傾向があり、正常時の彼にはおよそ似つかわしくないような一種のサタンの感情に襲われるようなことさえあった (Pierson 1899 : 132)

ミュラー自身の日誌、機関誌からもある程度そのことが伝わってくることから、この記事の信憑性を物語る。ミュラー自身は「私自身の常を離れてサタンの的に感情に捉えられ」(with satanic feeling, foreign to me even naturally) (Müller 1860 : 116) と言わせるほど、自身の平時の感情をも理性的にコントロールできなくなっていたという。必死で、「祈りの人」はそれを克服するべく、葛藤している状況が続く。しかしそれがなかなか思うようには回復できずに、結果的に半年間休職を余儀なくされた。

## 2-2. 休業と回復

1838 年 1 月 16 日の日誌には、冬の寒さもあるが、精神的にも肉体的にもかなり弱っている様子が伺える。もちろん、「主は素晴らしい、主の恵を通して」(How very good is the Lord! through his grace…) などと神の恵みに感謝を捧げようと自らを奮い立たせようと理性的には懸命にふるまっているが、「今日は本当に辛い、寒さが厳しいから、いや私の肉体の弱さゆえか、多くの薬を服薬している・・・」(but to-day I suffered much, either because it was colder than before, or because I felt it more, owing to the weakness of my body, and having taken so much medicine) (Müller 1860 : 118) などと「信仰の人ミュラー」「奇跡の人」にはおよそ似つかわしくないほどに随分弱気になっている。そのなかでもなお必死に祈り、神へ向かおうとする姿は痛々しくすらある。ミュラーの理解ではこれが「サタンの攻撃」であると自己認識しているゆえもあり、それゆえに罪の告白をしたともいう (for this was the object at which Satan aimed. I confessed also my sin of irritability) (Müller 1860 : 116)。

結局、この「頭の病氣」のために、孤児事業、教会の働きすべてを休業せざるを得な

くなる。正確に言うと 1837 年 11 月 6 日から 1838 年 5 月 9 日まで、集会（教会）での公での奉仕、すなわち説教、祝祷、朗読などすべての働きを休業して見合わせた。この判断が自らによるものなのか、同労者のクレイクか、妻メアリーなど他者の進言によるものかは定かではない。いずれにせよ、休職をし、4 月 6 日から 5 月 9 日はイギリスを離れドイツで静養している（Müller 1860 : 119 ; Pierson 1899 = 1964 : 134）。

そして、半年休業した結果、体調はある程度回復してきたようである。彼の日記には短く、以下のような記載がある。「5 月 8 日 今晚、私はギデオン集会の祈り会へ行った。そこで詩篇 103 篇を朗読した。そして会衆の前で私の最近の苦痛と苦悩について告白し、主に感謝を捧げることができた。1837 年 11 月 6 日以来、公の諸集会に出席したのははじめてのことであった」（May 8. This evening I went to the prayer meeting at Gideon. I read Psalm ciii., and was able to thank the Lord publicly for my late affliction. This is the first time that I have taken any part in the public meetings of the brethren since November 6, 1837.）（Müller 1860 : 119）

これを機に、半年間にわたる精神的危機からひとまずは脱して、次第に回復していく。「ひとまず」というのは、後述するが、この後も同様の症状の完治は難しく、しばらく続くこととなるからである。

### 3. 孤児院経営の危機 1838-1839

ミュラー自身は心身の不調により、半年間休業を余儀なくされたが、1838 年にはある程度回復して再び職務に戻ることができた。しかし、それと連動するかどうかは厳密にはわからないが、今度は孤児院自体が深刻な経営的困難になる。以下では、その状況について財務上の問題に焦点をあてていく。

#### 3-1. 財政悪化

1838 年 9 月 18 日の日記には以下のような記録がある。「T 兄弟（事務局長）の手元には 25 シリング、そして私には 3 シリング。1 ポンド 8 シリングで必要な肉とパンとお茶を買わねばならなかった。……私たちは極端に窮乏していた。資金は枯渇した。同労者たちの手元にもほとんどお金はなかった。」（Müller 1860 : 119）これは、「主が私たちの祈りを全く無視してしまわれたと思えた」（Müller V 2 1841 : 73）と思うほどの大きな試練であったようであるが、結果的には必要に応じて神が備えてくださった。この 1838 年 9 月 18 日の経営の危機状態については、7 年後の 1845 年 7 月の機関誌に振り返って以下のように述べている。



私たちの資金は極めて厳しい枯渇状態を続けていた。孤児たちの必要な資金が3日分もあるようなことは稀であった。しかしながら、そのようななかでも私が霊的試練と思えたのは、ただ一度である。それは1838年9月18日のことであるが、その時だけは、初めて主が私たちの祈りを無視してしまわれたと思えたのである。(Müller V 2 1841 : 73)

「初めて主が私たちの祈りを無視してしまわれたと思えた」ほどに、この時は深刻な状況であったようであるが、それまで、彼は設立母体であるSKIの規程にも記載されていたように、神のみに頼る方針であるゆえに、借金をしない。また神以外にその窮乏について、募金のお願いや呼びかけすらも一切しない、という方針を貫いていた(木原2021)。それゆえ、孤児院の経営状態について、妻とクレイクともう一名(おそらくしばしば登場する事務局長 brother T のことだと思われる)以外にはこのような窮乏状態を何も伝えてこなかった。

しかし、1838年の秋の孤児院経営の危機以降、ミュラーはこのような経営について秘密主義にしたことを反省して、神以外に訴えないという原則は変えないが、同労者である孤児院の働き手には経営状態を共有するようにした。また1840年8月以降には日曜学校の教師たちにも、「祈りのサークル」として事業の経営状態を詳らかに伝えるようになった(Pierson 1899=1964 : 143)。おそらくこのあたりは、先述した心身の不調により、自らの「弱さ」を自覚したゆえ、積極的に他者の助けや協力も得ることができるようになったのであろう。

「主の仕事においては、このサークルをもっと広げて、もっと多くの同労者たちに実情を知らせなければならない」(Pierson 1899=1964 : 143)とこれまでの方針を改めて「この事業に連なるすべての愛する兄弟姉妹を集め、何一つ隠さずにありのままを説明した。自分たちがどのような窮状にあるかを述べるとともに、まもなく神の助けが与えられることを確信すると語って励ました」(Pierson 1899=1964 : 144)。「ただし、今後どのような危機が訪れようとも、そのことを決して外部の人に漏らしてはいけないう、同じ厳格な訓示が繰り返された」(Pierson 1899=1964 : 145)。年次報告書の記載において、第三者に援助の要請ともとらえられることを記載するようなことは厳格に拒否した(Pierson 1899=1964 : 150-151)。これはミュラーの打ち出した神だけに頼るという当初から掲げた大原則に反するからである。こういう試練のなか、ミュラーの祈りが記録されている。以下の通りである。

主よ、あなたのしもべは貧弱な人間です。しかしそのしもべは、あなたに信頼し、人の子たちの前であなたのことを誇りにしております。ですから、しもべをうろたえさせないで下さい。また、「あれは単なる狂信に過ぎない。だからあのような徒労に終わったのだ」などと言われることがないようにしてください。(Pierson 1899=1964 : 124)

### 3-2. 貧窮とその助け

同じ 1839 年は引き続き、孤児院の厳しい経営状況が日誌に綴られている。たとえば、2 月 7 日では、以下のように記載されている。

2 月 7 日 手元にはもうなにもお金がない。私は神の助けを待ち望んでいる。何度も繰り返し神に願い求めたが、答えはなかった。T 兄弟（孤児院の運営の責務をとっていた人物であり、今日で言えば、事務局長のような立場）は 11 時から 12 時までに 1 ポンド 2 シリングが必要であると告げた。それがないと三つの孤児院のパンや他の必要が満たせない。しかし私たちは、2 シリングしか持ち合わせていない。（Müller 1860 : 143, 括弧内は筆者）

このような状況に際して、まず孤児院の働き手の同労者から直接の献金もあり、なんとか急場を凌いだ。それでも安定した運営には到底及ばない状態があった。この試練の最中、バーンステイブル集会（教会）の兄弟たち（brethren at Barnstable）から献金が届けられてこの困難を凌いだと記録されている。他にも Q.Q. から 7 ポンド（3 月 5 日）が送られたなどという記事もある。基本的に献金の名前は匿名であるが、多くはこのような匿名のキリスト者による支え手によって成り立っていた。特に Q.Q. はこの後にも多額の献金を捧げている（Müller 1860 : 145）。

その後、ミュラーは再び、体調不良に陥り静養のためにブリストルを離れることになった。9 月 4 日～9 月 9 日まで、エクスター（Exter）、トロウブリッジ（Trowbridge）、プリマス（Plymouth）、ティンマス（Teignmouth）で静養することとなった（Müller 1860 : 147）。9 月 4 日の記事では、以下のように記している。これによると、「頭の神経と全体の体のシステムの衰弱によって胃腸を壊している」（suffering from indigestion, by which my whole system is weakened, and thus the nerves of my head are more than usually affected.）（Müller 1860 : 147）となっているが、ここにきて、1838 年に半年休職した「頭の病気」の病状とこれを併せるならば、現代的に言えば、やはり自律神経失調症のような症状であったと言っていいであろう。

この後の記事のなかで何度も「私の頭の神経」（nerves of my head）（Müller 1860 : 147）が衰弱していることを繰り返し述べている。そして長文で、この病気の原因として睡眠との関係を医師の指導により、その重要性を理解したことを記録している（Müller 1860 : 149-151）。自分の体調不良を医師の判断に委ねているということからも、時に狂信的で神秘主義的傾向のあるような宗教者などが、医学の科学的知見に頼らず、自身の宗教的な方法（たとえば祈祷）だけに頼るなどの「癒し」体験を強調することがあるが、ミュラーはそのような立場をとっていないことがわかる。

この医師の診断、指導・助言として、極端な睡眠時間の短さが健康を害していること、その指導に基づき、病の回復のために 8 時間から 8 時間半の睡眠を確保したことで

健康が回復してきたことも述べている。一方で7時間ほどの睡眠をとることに対して、それが周囲には怠惰の象徴であると思われることに対する弁明の記述があり、このあたりからも彼のストイック過ぎる生き方とその辛さが伺える（Müller 1860 : 149-150）。

その年の暮れの1839年12月31日には、健康が徐々に回復してきたことへの感謝が述べられ、「私のメンタルの力がまた数年前と同じようになっている」（My mental powers also are as good as they have been at any time during the last three years.）（Müller 1860 : 153）と述べていることから、一過性の鬱的な状態が続いていたことが伺える。

#### 4. 更なる試練のとき 1840-1842

精神的不調、財政上の悪化など、孤児院草創期の試練について述べてきたが、1840年になってもまだそれは続く。また同時に草創期の試行錯誤の中から、慈善事業としてのある種の形のようなものがみえはじめるのもこの頃である。

##### 4-1. 慈善事業と神の事業

1840年にはミュラーは35歳となる。体調は徐々に回復し、前年から引き続き、孤児院の日々の資金面の工面とその苦勞が記されているが、それに対する祈りの応答として献金が神より満額与えられたことを喜んでいる。これらの象徴的な記事は1840年9月21日の日誌の以下の記事である。少々長いが、以下引用する。

9月21日：今日、ロンドンの隣人の兄弟が10ポンドを与えてくれた。（中略）主はいつも私たちのお世話をして下さることを教えるために、新しい助け手を起こして下さった。今まで助けてくれた人はイエスのみもとに召されることになるかもしれないし、ある人は主の奉仕へ冷淡になることがあるかもしれない。また今までと同様に援助したいと願いながらも、何らかの事情によりそれがかなわなくなるかもしれないし、援助できることがあっても、別の用途に使うことに導かれることだってある。

しかし、神に頼り続け、ただ生ける神だけに信頼していれば、たとえ誰かがこの世を去り、財産がなくなったり、愛が冷えても、あるいは他の働きに捧げられることがあっても、私たちは決して落胆することはない、見捨てられることもない。それゆえ、世界中でただ頼るべきは神だけであることに満足する。私たちが正しく歩む限り、神は良きもので満たしてください。学ぶことができるなら、その人は実に幸いである（Müller 1860 : 164）。

また1840年を振り返り、総括しているが、これはこの年に限定したというよりも孤児院事業5周年の振り返りともいえる。このうち、借金をしないというルールは生涯にわたって堅持される孤児院運営の重要な柱となるが、しかしながら、実際上はむしろこ

の方針によって財政面が不安定になったことは間違いない。それは神だけに頼ることをかたくなまでに堅持するミュラーの「実験」のためであり、そのため、特に借金をしないという明確な点は実験が成功するか失敗するかを知る分かりやすい一つの基準ともなった。孤児たちが「今日の糧（日々の糧）」に不足しない、というのがミュラーの掲げた評価軸である。

ところで、社会福祉学や社会福祉史の研究において、慈善事業の動機として対象者への同情心、憐みが軸であるという定説がある。それゆえ、慈善事業に対しては援助する側と援助される側は上下関係にあるというステレオタイプな批判が根深い。しかしながら、ミュラーの実践をこの枠組みでの慈善形態とみるならば、この枠組みの範疇には入らないと言わざるをえない。むしろ孤児という対象者への憐みの感情面での動機はそれほど強調されているわけではない。むしろ、クールであり、およそ、そこには「憐みの対象」というような情緒的意識は多くない。それよりもむしろ徹底的に強調されているのは、「神の栄光を孤児事業において現す」ことであり、そしてそれを世界に対して、また歴史に示すという大目的（実験）こそが特徴である。ミュラーのこの発想は特筆すべきである。なぜなら19世紀のボランティアの代表とされるミュラーについては、社会福祉学、社会福祉史においてこれまで通説とされてきた慈善事業へのステレオタイプの定説は、該当せず、修正を迫られる必要があるからである。ミュラーのみならず、同時代のキリスト教実践家の多くは、同情心というような情緒面を強調しているわけではなく、ストイックなまでの宗教心（神の栄光を現す）が先立っている。むしろそれこそが典型的に見られた姿勢と言うこともできる。つまり、19世紀のキリスト教慈善の典型的パターンはここにあるのではないかと思われる。それがむしろ博愛事業などと峻別される点であろう。

さて、この1840年の記録のなかで日曜学校、孤児院の子どもたちの記録がまとめられているが、8名の個人が信仰を持つに至ったこと、自らの集会（教会）へ導かれたことをこの年のハイライトとして記している。ミュラーとクレイクが牧会する教会員はこの年に114名が導かれ、総数525名となったこと、そのうち47名は主の知識に導かれた（おそらく国教会などの「名ばかりの教会員」が「回心」して集会に集い「本当の信者」となったという意味であろう）と記録されている。ミュラーへの個人献金が£242となったが、昨年£313、一昨年£350よりかなり減少してきている（Müller 1860: 170-171）。1841年も£238であった（ミュラーはこだわりがあり、これをいわゆる「給与」とは考えていないが、実質上は牧師の受ける「給与」と同じである）。この個人献金は過去4年間で教会員の数の増加と反比例して漸減してきている（Müller 1860: 188）。教会の方としては、試練の間も成長し続け、1841年の時点で教会員数は572名となり、昨年よりも88名が新たに加えられたという（Müller 1860: 188）。

#### 4-2. 「極限の極貧」と「内なる人」

1841年も引き続き孤児院経営は厳しい状況が続く。ただし、この年の日誌、機関誌は、金銭や食料がなくなっても、それでもその必要な物資が安定的に届けられていることが記されている。

ミュラーは、この頃から、多くの格言などを残すようになるが、たとえば他人の保証人になるべきではない、という箴言の聖書箇所からの教訓めいた話（Müller 1860: 173-174）やメディテーションの効用（Müller 1860: 178）、そして食事前の早朝の散歩などの霊肉両面での健康の記載（Müller 1860: 179）が目立つ。これらに通底するのが、ミュラーがこの年より頻繁に用いはじめた「内なる人」（inner man）（Müller 1860: 177; 179; 180）という発想である。この「内なる人」というのは、パウロ書簡で使用される用語（ローマ7章22節；コリント第Ⅱ4章16節；エペソ3章16節）を意識しているのであるが、メディテーション、散歩、聖書朗読、祈り、すべてはこの「内なる人」を養い育て鍛えるためのものであると理解している。この「内なる人」が磨かれることこそが、外形的孤児事業、宣教事業よりも何よりも重要であることを悟ったミュラーは、孤児事業の試練とは裏腹に、より一層「内なる人」へ焦点が向けられ、内面化していくことになる。

ブラザレンの伝統に従い、教会から一定の給料を受けることを拒否し、自由意志の献金のみ献金箱から受ける方法に至った経緯は既に明らかにした通り（木原 2021）であるが、ピアソンによると、1841年7月にミュラーとクレイクは、このような献金方法ですら、自分たちに対して、「他の信徒たちよりも不当に高くしているように見えるのではないか。あたかもふたりだけが職務上の重要部門を負い、言葉と教えにおいて奉仕してくれる他の人々を十分に、同等に認めることを拒むかのように見えるのではないか。そこでふたりは、このような方法で献金を受けることをやめることにした」（Pierson 1899=1964: 167）としている。このような献金方法の変更が影響したと思われるが、1841年11月2日の日誌には「もっとも貧しい経験（the greatest poverty）」（Müller 1860: 181）など一層、自身の生活面においては厳しい状況に置かれたようである。同時に孤児院運営面も更に厳しい状態に置かれている。その後も数か月間これが続き、もはや孤児院の経営を断念せざるを得ないほどの状況になった。その深刻さは、年次報告書を5か月間延期したほどであった。ピアソンによると、「それまでの数か月の間は比較的豊かな供給を受けているのに、今は、日々、あるいは食事ごとに、信仰の目を主に向けなければならなかった。いくら祈り続けても援助はなく、時には全く裏切られてとさえ思えるほどであった。」（Pierson 1899=1964: 168-169）と指摘するほどの深刻さであった。

この年次報告書の発刊延期の理由は、現今の事業の窮乏を伝えて、神ではなく、人に

頼ってしまう可能性があり、その「誘惑を避けたい」というのがミュラーの説明であった（Pierson 1899=1964:169）。しかしながら、今日の社会福祉法人であれば、それが正当な理由にならないのは明らかで、むしろ社会的責任を問われることであろう。

いずれにせよ、ミュラーは「この時（1841年12月12日から1842年4月12日まで）」ほど、信仰が厳しく試されたことはないと記録している。またこの4か月間というものは、主が「さあ、これで私は、あなたが本当に私に寄りかかり、私を仰いでいるか、はっきりわかるであろう」（Müller 1860:185）と記す通りの試練の年であり、「内なる人」を徹底的に鍛える期間でもあったと考えた。

#### 4-3. 「暗闇を歩く」

この試練の期間は、必ずしも記録が十分でないため正確な時期等が特定できずに分かりづらいところがあるが、幾つかの資料から判断して、彼が言う「暗闇を歩く」（Müller 1860:185）ことになった試練の時に起こったことは以下の通りである。

1842年の新年が明けても、「試練」は続き、一層厳しくなっている。2月8日の日誌には「もし主が明日の午前9時までに生活物資を送って下さらないのなら、主の御名は辱められてしまう…」（if the Lord were not to send means before nine o'clock tomorrow morning, his name would be dishonored.）（Müller 1860:190）とまで書いている。これは愚痴というより、状況を直視した正直な告白であり神への嘆願であった。その直後に、「しかし、私は、主は私たちを見捨てられないと確信している」（But I am fully assured that he will not leave us）（Müller 1860:190）とも述べている。いずれにせよ、ミュラーの抱える困難と揺れている心境があったというのが適切であろう。その日の夕方、手作りの9つのプラムケーキをある集会の女性（氏名は不明）が届けてくれたという些細な出来事であるが、これも主の祈りへの答えであると珍しく感情を踴わらにして素直に喜んでいる（Müller 1860:190）。

依然試練は続く。2月19日には、「私たちの物資は再び完全に底をついた」（Our means were now again completely spent.）（Müller 1860:193）と記しているように、一層厳しい試練となる。孤児のための備えとしての「明日の糧」はもはや尽き、そしていよいよ「今日の糧」も尽きるかのような深刻な状況となった。そのような極限状態であっても、RC兄弟が手を差し伸べてくれて「今日の糧」を届けてくれたことで急場を凌いだことなどが記されている。

2月25日には、以下のように綴り、窮乏と貧困がもはや耐え難いほどまで厳しい状況にきていることを記している。「今ほど私たちの渴望はかつてなかった。私たちの信仰の試練は、今週ほど厳しいときはありませんでした。」（Greater than now our need had never been. Our trials of faith have never been so sharp as during this week.）（Müller 1860:

195) この状況は3月になっても一層深刻化してくる。3月17日日誌には、以下のように綴っている。「今朝、この困窮は数か月続いているが、深刻になってきていた」(This morning our poverty, which now has lasted more or less for several months, had become exceedingly great.) (Müller 1860 : 196)。そのたびごとに祈りによって、少額ながらもその日の必要が満たされるような献金があったり、今日一日の糧となる食料が届けられたり、まさに自転車操業そのもので、ぎりぎりながらも子供たちが「今日の糧」が途絶えることなく、結果的に飢えることなく、寒さに凍えることなく、守られたことへの感謝も表明している。

また、回想録のような形で、失った父の死と兄の死についても言及している。彼らが本当に悔い改め、キリストにある新生、すなわち「救い」が確かであったことの証拠はないが、そのことに対して平安があったことも言及している (Müller 1860 : 201)。また、自分の長男エリヤも試練の年に亡くしている。まさに、この試練の年に「暗闇を歩く」(Müller 1860 : 185) ことはあったが、完全に平安であったこと (my soul was at peace, perfectly at peace), 泣きはしたが、それはむしろ慰めが与えられた「喜びの涙」であったことを述べている (Müller 1860 : 201)。

このような中であるが、4月12日に東インド諸島のある人より£100が届けられた。そして、これを機にこの深刻な貧困状態が少しずつ改善されてくることになった (Müller 1860 : 198)。5月10日の日誌には、この危機的状況にあっても、孤児たちは必要な栄養ある食物 (日々の糧) や着物すべてが与えられたことを振り返っている (Müller 1860 : 199)。その後には、この試練の総括が記されており、第Iコリント12章9節の信仰の賜物について言及している。それによると、信仰はあくまで賜物であり、癒しや預言と同じく、神から与えられる賜物であり、それを自分にもあてはめている。そしてそれは訓練されていかなば成長しないことも、自分自身の事業への試練を踏まえて考察を加えている。この場合の信仰とは一般的な意味の信仰ではなく、「特殊な賜物」の意味であるが、すべての人がそれを通して成長できることも強調している (Müller 1860 : 200)。

そしてあらゆる艱難と試練にあっても神がすべてを良きを守ってくださるという絶対的な信仰について考察している。それによると、自分自身が「精神的に不調 (insane)」であったときも、ローマ書8章28節の「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」(新共同訳) の言葉を常に支えに最終的には平安であったと述べている (Müller 1860 : 201)。

危機的状況ではありながらも、孤児院のほうは、この時点で96名の孤児が在籍し、その内訳は、30名が女子、37名が幼児、29名が男子となり、皆、元気に守られている

ことを感謝している（Müller 1860 : 206-208）。こうして、孤児院草創期に襲ってきた嵐のような苦悩と試練を「暗闇を歩き」ながらも、ミュラーはそれを乗り越えて、孤児事業は次のステージへと向かっていくことになるのである。

## 結 語

本論文では、ジョージ・ミュラーの孤児院開設の草創期に焦点をあて、開設の動機、そして直後の精神的不調と財政的危機について議論した。これまでのミュラーの偉人伝や伝記類では、2000人規模の孤児院経営（孤児数は述べ1万人を超える）という偉業達成の「奇跡」的事業や諸困難を「祈りによって解決」したという「奇跡的」エピソードを軸に紹介されてきた。しかしながら本論では、そこにはハイライトをかけず、これまでの多くの伝記ではあまり触れられてこなかったミュラーの内面的葛藤、特に半年間精神的な不調により休業せざるを得なかった経緯、そしてミュラーの孤児院経営上の特徴、特に自転車操業とならざるを得ない逼迫した財政状況、窮乏実態に焦点をあてた。

まずミュラーの孤児院経営についての論点である。神のみに頼ることを示す（実験の）目的達成のため、その趣旨を理解したキリスト者以外の献金は受けない、一切借金をしない、募金目当ての広告などをしないという経営方針は、結果的にそれを貫き通そうとすればするほど過酷なまでの財政危機を生み出すことになった。そして文字通り「明日の糧」が滞るという危機的状況が生じ、生活面で不安定さを露呈したことは間違いない。しかしながら、「明日の糧」への心配と危機はありながらも、不思議にも孤児にとって、「今日の糧」（日々の糧）は一日も尽きることがなかったことはミュラーが述べる通りである。その意味では彼の「実験」は成功したことになるのだろう。ただし、これらを「無謀」とするか、「奇跡」と呼ぶかは評者に委ねるべきであろう。一方で、事実として、貧弱な財政基盤ゆえに、逆説的に世界のキリスト者篤志家の強力なサポーターの多額の献金によって支えられたことも事実であろう。そしてミュラーの生前には総額£150000に及ぶ献金（日本円では200億円相当）が与えられ、孤児にとっての「今日の糧」なり、そしてこれが後にアシュリー・ダウン移転の源泉となり、事業の飛躍的拡大の土台となったのは間違いない。

また、ミュラーという人物の神への忠実さと敬虔さ、そして愚直なまでの誠実さについては、冷徹な歴史家の懐疑的な眼差しをもってしても否定される点はないとすることができよう。しかしながら、その忠実さ、敬虔さ、信仰深さなどの背後で見落とされがちなのは一人の人間としてのミュラーの「脆さ」と「弱さ」の面であろう。つまりミュラーの抱える内面の脆さ、特に休業せざるを得なくなった「頭の病気」という精神・神経症状については、彼を理解する上では不可欠であり、特筆すべき点であろう。とは言



っても、それは単純に偉人の影の面や負の側面としてではなく、あくまで人間としての普遍の「脆さ」と「弱さ」でもあり、ミュラーの場合、必死にその弱さと格闘しつつ、それゆえにこそ、天の助けを求めて神に必死に頼り続けようとした愚直な姿にこそ、むしろ「偉人ではない」「奇跡の人ではない」ジョージ・ミュラーという人物の評価の本質があるのであろう。

\*本研究は JSPS 科研費 JP19H01601 の助成を受けています。

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP19H01601.

#### 注

- (1) 本稿では、Müller, George (1837) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume I, London: Dryden Press の引用に際しては、2006年の復刻版 (Hamburg: Tredition) を使用している。この版は1895年第9版を基に復刻されたものである。このなかに、日誌、一部の書簡がそのまま翻刻されたうえで掲載されている。
- (2) 本稿では、Müller, George (Wayland, Heman Lincoln edited & condensed) (1860) *Autobiography of George Müller -The life of Trust: Being the Narrative of the Lord's Dealings*. Boston: Gould and Lincoln の引用に際しては、2019年の復刻版 (Compass Circle) から使用している。この文献は、Heman Lincoln Wayland が1860年に編纂しているが、ミュラーの記述において文脈上、意味内容が解読できにくい (不明のところ) 等を編集者挿入という形で解説している。特に初期の頃の記録では英語がネイティブでないミュラーの英文を文法的・語彙的に校正した可能性もある。
- (3) 本稿では、Pierson, Arthur Tappan (1899) *George Müller of Bristol: His Life of Prayer and Faith*. London: Pickering and Inglis の引用に際しては、1999年の復刻版 (Kregel Publications) を使用している。
- (4) ミュラーの所属はブラザレン系の集会 (教会) のため厳密にはいわゆる通常の教会における「牧師」ではない (木原2019)。

#### 参考文献

- 木原活信 (1993) 「同志社のアイロニー -山室軍平の中途退学-」『新島研究』第82号。
- 木原活信 (1999) 「ジョージ・ミュラーが石井十次に及ぼした影響」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』同朋出版。
- 木原活信 (2018) 「ジョージ・ミュラーの思想形成におけるフランケの敬虔主義の影響について」『評論・社会科学』(127) 1-17。
- 木原活信 (2019) 「英国初期ブラザレン運動とジョージ・ミュラー -その分裂と挫折が福祉実践思想形成に及ぼした影響をめぐって-」『キリスト教社会問題研究』68号 1-33。
- 木原活信 (2020) 「ジョージ・ミュラーの来日をめぐる日本のキリスト教界の反応と社会福祉史への影響」『キリスト教社会問題研究』69号 1-30。
- 木原活信 (2021) 「ジョージ・ミュラーの青年時代の迷走と回心-孤児院創設に至る軌跡 (1805-1835)-」『評論・社会科学』137号 119-149。
- Grass, Tim (2006) *Gathering to His Name: the Story of Open Brethren in Britain and Ireland*, London: Pater-noster Press.
- Müller, George (1837) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume I, London: Dryden Press. (= reprint 復刻) 2006 Hamburg: Tredition (=1895年第9版を基に復刻)。
- Müller, George (1841) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume II, London: Dryden Press.
- Müller, George (1845) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Vol-

- ume III, London : Dryden Press.
- Müller, George (1856) *A Narrative of Some of the Lord's Dealings with George Müller written by himself*. Volume IV, London : Dryden Press.
- Müller, George (Wayland, Heman Lincoln edited & condensed) (1860) *Autobiography of George Müller -The life of Trust : Being the Narrative of the Lord's Dealings*. Boston : Gould and Lincoln = 2019 復刻版 Compass Circle.
- Pierson, Arthur Tappan (1899) *George Müller of Bristol : His Life of Prayer and Faith*. London : Pickering and Inglis (=復刻版 1999, U.S.A : Kregel Publications).
- =アーサー T. ピアソン著 海老沢良雄訳 (1964) 『信仰に生き抜いた人 ジョージ・ミュラー その生涯と事業』いのちのことば社.
- George Müller org 公式サイト <https://www.georgeMüller.org/> (2021年3月1日閲覧).
- George Müller 資料館公式サイト <https://www.Müllers.org/> (2021年3月1日閲覧).

---

Anguish and Trials of the Early Days  
of George Müller's Orphanage (1835-1842) :  
His Mental Distress and the Financial Crisis of the Orphanage

Katsunobu Kihara

---

This paper focuses on George Müller's early days with the Bristol orphanage (1835-1842) and discusses Müller's mental crisis shortly after its opening and subsequent financial crisis. Biographies written about Müller thus far have centred on the episode showing his 'miracle' works and indicating that the difficulties of managing the orphanage with 2,000 orphans were 'solved by prayer'. However, in this paper, I focused on Müller's internal conflicts and management issues, which have not been touched upon in previous biographies. I analysed the circumstances in which he had to take a leave of absence due to mental problems for six months as well as the tight financial situation. Müller's policy was to 'experiment' with the faith that relies solely on God, so he would not receive donations from anyone other than those who understood his purpose, would not borrow any money from anyone, and would not advertise for collection. A severe financial crisis occurred due to his adherence to this policy. However, paradoxically, because of the orphanage's poor financial base, it was possible to collect large contributions from many Christian volunteers around the world. He also continued to rely on God while struggling with the 'weakness' of mental and neurological symptoms of a 'head illness'. His way of life, as somebody who was 'not a miracle person', is probably the most important point in understanding him.

**Key words** : George Müller, Bristol orphanage, Christian social welfare, Brethren movement

